

11 ウイリアム・ハーヴィ『普遍解剖学講義』における心臓の運動の提示

月 澤 美代子

血液循環の発見者、ウィリアム・ハーヴィの残した一次資料は、その知名度に比べて驚くほどに少ない。三冊の刊本、十数通の手紙、そして、British Museum に所蔵されている二種類の手稿である。このうち第一の手稿には、'Prelectiones Anatomie Universalis『普遍解剖学講義』という表題が付けられており、ハーヴィが一六一五年八月に任命され、その後長く勤めたロンドン医師会会(The Royal College of Physicians of London)のラムリ講義、および、医師会主催の公開解剖のための講義準備ノートと考えられている。

この講義ノートには、「心臓の搏動による血液の円環状の絶え間ない動き」すなわち、血液循環が明確に記述されていることもあり、長くハーヴィ研究者の注目を浴び

てきた。しかし、この手稿は、ハーヴィの悪筆もあり、きわめて読みとりにくく、本格的な解読作業が行われ、その成果を享受できるようになったのは一九六〇年代に入ってからである。

この解読、英訳を行った一人である G. Whitteridge を中心に、ハーヴィ研究は飛躍的な展開を遂げ、このノートと *De Motu Cordis* 『心臓と血液の運動』との関連性が調べ上げられ、特に、血液循環の発見に直接つながると思われる心臓の運動の記述に関しては克明な研究が行われてきた。

しかし、文献学者である G. Whitteridge は、当該時代の医師集団、ないし、より広い知的状況の中でのハーヴィの「問題の場」を十分に視野に納めておらず、その英訳には「近代主義的な」解釈に基づく用語が不用意に用いられている。

本報告は、『普遍解剖学講義』におけるハーヴィの心臓の運動の記述を、当該時代の医師集団の問題構成の中で読みとり、ハーヴィの「問題の場」と、自らの説を形成し他者に提示する新しい方法を求める模索の過程を理解

しようとするものである。

ラムリ講義は、外科医の教育を目的に医師会に寄付された講義だが、ハーヴィイが講じていた解剖学には、アリストテレス自然学の影響を色濃く受けた哲学的解剖学 (*anatomia philosophica*) が重要な位置を占めていた。ここでは、まず全身が部分に分けられ、その部分について、固有の知が明らかにされていく。たとえば、心臓についての固有の知とは「cor」というコトバを定義づけるものは何か」であり、この問いは、さらに「いかなる、*functio, actio, usus, utilitatis, propter quid* が、cor と「コトバを定義づけるのか」と置き換えられていく。心臓の運動 (*motus*) に対する問いは、こうした cor の *actio* を説明づけるものとして解剖学講義の必須の一部とされていた。『普遍解剖学講義』においては、こうした問いに対する答えのほとんどは、過去の諸説の中から選び取られ並列的に示されることが多く、過去の諸説と異なる自己の説が自らの観察に基づいて提示されることは稀である。しかし、心臓の運動に対する問いは、こうした稀なもの

の一つとして提示されている。すなわち、公開解剖のテキストとしていた Caspar Bauhin の *Theatrum Anatomicum* における、心臓の運動の記述が示され、そこにおける用語の混乱への疑念が表明される。この後、講義ノートは、ハーヴィイの思考の展開に従い、何度もまとめ直され、最終的に、心臓の運動の動因を問うことなく答えが導き出されるような形に「問い」がつくり直され、ハーヴィイ独自の説が構成され、提示されていく。

ここにおいてハーヴィイは、機械論的な「問題の場」、すなわち、心臓の運動の力学的原因を論ずる場から最も遠いところに身を置いていたと言える。

(順天堂大学医学部医史学研究室)